

城 山 三 郎

小説日本銀行

ポケット・ライブラリ

39

新 潮 社 版

著 者 城 山 三 郎

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社
会 社

東京都新宿区矢来町71番地

電話東京 (341) 7111—9番

振 替 東 京 8 0 8 番

印 刷 所 塚田印刷株式会社

製 本 所 神 田 加 藤 製 本

定 価 2 9 0 円



1963年1月31日 発行

1963年3月15日 3 刷

乱丁，落丁本は本社
はお買求めの書店に
お取替えい~~て~~します

城 山 三 郎

小説日本銀行

ポケット・ライブラリ

39

新 潮 社 版

插画
上
西
康
介

日本橋近い本石町二丁目は、江戸時代、金貨の鑄造や上納金の鑑封・潰し金を行っていた幕府直轄の金座のあったところである。三井家（越後屋）から買いとられたが、基礎工事で掘り起した土を選鉱した結果、土地代金以上の金がとれたという。そこに、いま日本銀行がある。

旧館は、東京駅や両国国技館の名設計者辰野金吾の設計にかゝり、高橋是清が建築事務主任となって明治二十三年起工。明治二十九年二月末竣工。工費百十一万円を要した。

この旧館を三方からとり囲むようにして、昭和四年から十三年にかけ、地上五階地下三階の新館が三回にわたってつぎ足された。旧・新館いずれも石の円柱・部厚な石の壁で装われ、窓は高く細く、堅牢で近より難い威厳を持つ。ベルギーの国立銀行を模範とし、イタリー・ルネッサンス期のパラディオ様式によるという。

だが、別の見方もある。近づき難いのは、威厳ある様式のためでなく、英国イング

ランド銀行の城砦的な構造をそのままねしたためだと。

イングランド銀行は、一六六〇年ごろ、テームス河畔に設立された。時あたかも重商主義・重金主義の時代であり、国家の富は黄金で代表され、オランダ海軍がテームス河をさかのぼり、イングランド銀行の黄金奪取をくわだてる危険があった。二大海軍国といいながら、英国海軍はオランダに比べてなお劣勢であり、イングランド銀行の前衛拠点としてロンドン塔を構築することによって、ようやく防戦することができると。銀行は、それ自身城砦となり、石の壁を厚くし、窓を小さくすることが必要であった。

この説が正しいとすれば、海賊的海軍はなやかなりしころの紅毛碧眼の徒の遺物をいまわれわれは日本橋本石町に見るわけである。旧館正面はまさしく城砦のしるしの如く高い石の壁でふさがれ、城門をくぐり、石だたみの中庭を抜けて、はじめて目指す建物に近づくことができる――。

小説日本銀行



第一章

「日銀券は昭和十三年以来殆んど間断なく、毎年巨額に増加している。商品の流通高が日銀券のこのように巨額な増発と歩調を共にして増加したとは考えられない。従って……昭和十三年以来最近に至るまで、インフレは間断なく進行して来たことが推定できる。」

日銀券増発の速度が特に激しかったのは、昭和一六年から一九年に至る太平洋戦争の間と終戦から二四年のシャウプ案の実施までの時期である。この時期には、日銀券は加速度的に増加している。太平洋戦争中、日銀券が増発されたのは、戦争の遂行のためであった。政府は公債を日本銀行で日銀券にかえ、その金で戦争の遂行に必要な軍需品を買入れたのである。日銀は、手持の公債を売り出して、一たん発行され

た日銀券を吸収しようと試みた。太平洋戦争中、毎年、相当巨額な民間資金が日銀に回流しているのはそのためである。しかし、日銀の引受けた政府の公債はそれより多く、結局、加速度的に日銀券の発行はふえたのである。終戦後終戦に伴う色々な事務を処理するため、政府の支出は著しく膨張した。民間の企業家は、その復興のために巨額な資金を必要とした。政府及び民間に、所要の資金を供給したのは日銀であった。日銀は、日銀券を増発して資金に対する需要を満足させた。その結果日銀券は加速度的に増加したのである。」（『日本経済図説』）

新宿三越のちょうど裏あたりに、その占師は半円をえがいて多勢の客を集めていた。

人垣は二重にも三重にもなり、道路をふさいでいる。戦闘帽に兵隊服姿の男が多かった。復員者ばかりというわけではない。そのころの唯一の服地らしい服地が、軍服であったためである。色あせた国民

服の肩から、ズックの雑囊ぞうのふを下げた男も居た。ひつつめ髪にモンベ姿の女もまじっていた。

その道を、津上幸次は一年先輩の長谷川泰三郎に連れられて通りかゝった。長身の長谷川が、肩越しに中をのぞきこんだ。津上も背のびして見た。

半円の中心に居るのは、ゴマ塩まだらの顎ひげを生やし、射るような黒い眼を持った男であった。つぎの当ったシャツ、先を結んだカーキ色のズボンに軍靴。足もとに、大きな螺貝はらばいが置いてあった。

占師はアスファルトの路面に白墨でえがいたいくつかの円を竹の先で指しながら、光る眼は聴衆から離さず、弁じ立てゝいた。ひどく熱心な口調であった。誰かの運勢を占っていたのか、オミクジでも売りつけようという肚はらなのか、その辺のことはわからない。余りに熱っぽいので街頭演説か宣教を思わせた。

聴衆はひとり残らず聴きはれていた。職もなく仕事もなく、空しい休暇が無限に続いて行きそうな時代である。ある者は、占師の口もとに予言を求め、

ある者は、暇つぶしの娯樂を求めていた。

新たに加わった津上の顔にちらりと眼を走らせ、

占師はしゃべった。

「……男にとっちゃ、それほど幸福はない。やっている仕事が好き。仕事にはり合いを感じる——これが第一。次に、生涯の伴侶にする女が好き。女が性に合っている——これが第二。仕事と女、二つとも気に入って居れば、人生の宝は全部、手にしたのも同じだ。その人生は至上至福、悔いなきものと思わにゃいかん」

その言葉は、津上の頭を電撃のように打った。人生の幸福。学生時代、人生とは何か、幸福とは何かと、津上たちは考えつづけ、議論しつづけた。デカシヨの言葉通り、むさぼるようにデカルトを読み、カントを読み、ショーペンハウエルも読んだ。哲学に、文学に、歴史に、狂おしいほど人生の意味をたずねつづけた。懷疑の果てに、ノート一冊をリュックにひめ、伊豆大島に旅立ったこともある、心の中の疾風怒濤時代といわれ、そうして人生について

の観念形成の時期を通り過ぎたものの、津上の前には、実人生について何ひとつ確乎とした指針はなかった。

その紆余曲折して求めてきたものを、占師は無難作に、眼にもあらわに、投げつけてきた感じである。
（仕事と伴侶——二つながらに気に入っていれば……）

そうだ。ただ、それだけのことも知れない。人生の幸福なんて、案外、簡単なものだ。その二つを手に入れさえすれば——。

津上は、占師の言葉をくり返し噛みしめた。眼は相変らず占師を見、耳はその声を聞いているのだが、何も見えず、何もきこえなかった。

（仕事と伴侶——二つながらに……）

そのとき、耳もと近く、長谷川のかん高い声がひびいた。

「つまらぬ、行こう」

津上はもう一度、占師を見た。夕暮近い斜めの陽の中で、きらきら、その眼が光っていた。

歩いて行く前方には、炎のあとが黒く残ったビルが点々と散り、そのビルに身を寄せてバラック建ての店がいくつか、かたまっている。人の足は、その一割にある闇市に集まっていた。

帆布や板を敷いただけの店が、少しずつ品物を並べている。軍服や軍靴。油脂そのもののかたまりのような石鹼。一足百円の値札のついた地下足袋。タバコの巻紙も売っている。古本屋では、マレー語・支那語の辞典が、やはり巻紙材料に売られている。首から下げた板の上で、闇タバコのコロナを売っている老婆もあった。

長谷川泰三郎がそれらの店に眼をくれようとし、ないのに対し、津上は売り手買い手の表情まで気になった。あくどい金もうけをたくらんでいる顔、生活にひしがれ、いためつけられている顔。どれもがインフレの波にゆられている顔である。本石町二丁目、津上たちのつとめ先から溢れ出た波が、大きなうねりになって、この人たちを巻きこみ翻弄している。戦争は終わったのに、さらに新しい試煉がはじま

っているのだ。

新宿駅に近いバラック建ての派出所には、若い警官が二人、表を見張って立ち、その奥で刑事らしい男が瘦せた青年を取調べていた。こゝでも、時間をもてあました連中が派出所をとり囲んでいる。

横目で見ながら通り過ぎようとすると、ヤジ馬の会話がきこえた。

「どうしたんだ」

「スリだそうだよ」

犯罪者などまるで興味が無いというように、顔をまっすぐ立てて歩いて行く長谷川に、津上は話しかけた。

「スリがつかまったようですね」

「そうかい」

そっけない返事であった。津上はつゞけて、「スリといえば、最近、何かで読んだのですが、財布はとつても、中のお金とはらないスリが居るそうですね」

「何だって」

「金をとったところで、ろくな物は買えやしません。ところが、しっかりした財布、たとえば本革の財布なら、十分に値が出ます。お札と政府の値打ちは一
日一口下るばかり。紙きれのような札をとるより、
財布そのものの方が値打ちがあるんだそうです」

「札が紙きれか」

長谷川がねじれた声になった。津上が小さくうなずくと、浴びせかけるように、

「日銀マンが口にすべき言葉じゃない」

津上は、長谷川の顔を見直した。津上が言いたいのは別のことであった。だが、たしかに、札を紙きれにたとえるのは悪い。

「そうでした。気をつけます」

すぐ前を、垢でまっくろになった浮浪児が泣き声をあげ、のめるように走って行った。その一劃にある食べもの屋から追われたのであろうか。

油いための音があちこちでし、芋をふかす湯気や、クジラの肉のやけるにおいが漂ってくる。顔中を口にし、野獣のようにクジラを噛んでいる男がある。

夕空を仰ぐようにして器の底の最後のひとしずくまで芋汁粉を吸いとりとうとしている女が居る。みんな、立ったまゝである。なりふりも構わない。わずかの配給米も遅配つゞき。一月ほど前には、米よこせデモが皇居にまで押しかけていた。明日への生命をつなぐのに、誰しもけんめいなのだ。

津上は空腹をおぼえ、なまつぶをのんだ。長谷川が立ちどまって、津上の顔を見た。

「なかなか、これはという店はないな」

「何もごちそうでなくていいんです。クジラでも結構です。それにバクダンの一杯でも」

長谷川は顔をしかめた。

「もう少し歩いてみよう」

「こんな状態じゃ、いくら探しても……。クジラだつて、ごちそうですよ」

長谷川はきびしい眼になった。

「食う物は問題じゃない。らしい店を探してるんだ」

「らしい店？」

「そうだ。いくら何だつて、屋台で立ったまゝ、の

み食いしては、矜持にかゝわる。誰が見ていないとも限らんからな」

押しつぶされたようにして黙った津上に、長谷川はくり返した。

「どこで誰が見て居ないとも限らん」

その言葉に、津上は唐突だが、日銀のトイレットを思い出した。

トイレットもまた大理石づくりの堂々たる部屋だが、一つ一つの小便器の間の目かくしの石板が、背丈よりはるかに高く、奥行きも深い。隣りの男の一人物はおろか、顔も姿も見えないように出来ている。それぞれ顔を見合わせることもなく、人知れず来て、人知れず去る。用を足しながら隣りの男と話するという無作法は思いもよらない。それほどに用心深く神経質であり、それほどに豪勢でもある。

(誰にも見られないように——)

津上の口もとには、思わず笑いがにじんだ。長谷川は氣をとり直したように、

「もう少し歩いてみよう」

津上はおとなしく従った。国電の重くひきずるようなひびきが、また空腹にこたえてくる。こんなことなら、銀行の食堂を利用して居ればよかったと思う。直営の牧場からの新鮮な牛乳や山羊の乳ものめるし、もう少しましな食べものもそろっている。建物の豪勢さをいえば、このちゃんなブラックと同じ地球の上にのっているのがふしぎなくらいである。

「きみは実際、運のいい男だなあ」

長谷川が思い出したように言った。

「はあ、皆さんにそう言われています」

入行して三カ月の講習・見習期間を終え、津上は秘書室に配属されることになった。秘書室勤務は、日銀マンの出世コースとみなされている。その日も、それを祝ってごちそうしてやると、長谷川が新宿に誘ってくれたのだ。東大では一年ちがい、同じ下宿に住んでいたつながりである。

「東大出はきみだけじゃないし、こんなことを言っでは何だが、とくに毛並みがいいというわけでもない」

いのになあ」

「はあ、その通りです」

津上はその春、東大経済科を卒業した。日銀に同時に入行したのは、他にも東大卒業生八人。競争がはげしかっただけに、成績もそろって良い。

昭和十四年ごろまで、日銀では毎年、政・法・経・商の四学科から一人ずつ、合計四人の東大卒業生を採用していた。ところが、昭和十年に限って、東大から十人採った。その学年に、名門の子弟が多かったためである。いわく、第一銀行頭取の長男、元蔵相の令息、西園寺公の令孫……。この伝統は戦後もつゞき、旧皇族・華族をはじめ、政財界の名士の子弟が多い。その中で、津上の父は、地方の国立大学の一教授に過ぎない。とくに選ばれた理由は、多少、字がうまいという程度のことしかわからなかった。強いて言えば、調査役である松島の推薦があったかも知れないことだ。父の旧知である松島調査役は、就任間もない新総裁大喜多明郷の腹心の一人といわれている――。

何がおかしいのか、二人の若い女が笑い声をあげて通り過ぎて行った。董色の光の中で、その横顔はいかにも屈託なげで、たのしそうであった。一人はスカート、一人はモンペ、闇市の暗いどよめきも知らぬげに、肩をぶつけ合うようにして歩いて行く。津上は思わずふり返って見送った。

長谷川の声が、背に落ちた。

「きみのためを思つてのことだが、銀行の女の子に眼をつけたらしちゃいかんよ」

「……」

「あいつは店の子と結婚したと、一生、言われることになるからな」

「それが……」

津上の言葉の先を遮り、

「いゝ縁談が山と持ちこまれてくる。慎重に良縁を選んでからきめることだな」

「あなたの場合はどうです。あなたには許婚者が……」

「あゝ。それでも、降るように縁談を持ちこまれる

よ。いまにわかるが、どの上役のひき出しにも、いく人かの花嫁の写真がしまわれている。考えてみれば、結婚相手として、日銀マンほど条件のそろった男はないからなあ。学歴は極上だし、家庭や血統は十分に調査済み、それに給与や待遇はよいし、遅配欠配のおそれはみじんもない。絶対つぶれることのない就職先だからな。それに、日銀づとめといえ、どこに行っても信用され、尊敬の眼で見られる。PTAに出れば、たちまち役員だ。そればかりじゃない。互いにミスしまいと眼を光らせているから、身持や素行の悪くなる心配もないというわけだ」

「なるほどねえ」

立てつゞけに並べられてみると、津上も感心する他はなかった。親にしてみれば、愛する娘をやるのに、それほど安心できる相手はないであろう。

（おれに娘でもできれば、やはり日銀で筆^{ひら}さがしをするかも知れないな）

そんな思いも走るほど、長谷川の言葉には説得力があった。

だが、津上はふと思ひ直して、

「長谷川さんは、その縁談を片っぱしから断ったんでしょうね」

「うん」

長谷川は気重く言ってから、

「断らざるを得んじゃないか」

「あれほど熱烈なロマンスで、ぼくらを悩ませたんだからな」

長谷川には、岩佐トシ子という学生時代からの恋人があった。トシ子はアルバイトしながら、女子専門学校の家政科に通っており、来春卒業と同時に結婚のはずであった。

「トシ子さんは、その後、元気ですか」

「あゝ、そうだと思ふな」

長谷川は言葉をにごした。その言い方には、たゞの照れくささというより、何か暗いかげがあった。けんかでもしたのかなと思う。津上はその話を打ち切った。

闇市の切れ目には、瓦礫の山がのぞいていた。鉄